

泌尿器科紀要

第 4 卷 第 10 号

昭和 33 年 10 月

随 想

北 欧 の Colleagues を 訪 ね て

久留米大学教授 重 松 俊

今年の7月26日から30日までのストックホルムで開催された第11回国際泌尿器科学会に出席した帰りに訪問したスウェーデン、ノルウェー、デンマークの泌尿器科医達に就いて簡単に述べて見たい。

学会終了後訪問する予定にして居たが、大越博士のおすすめで7月24日早朝の飛行機で土屋、大越両博士のお伴をして Gothenburg の Prof. E. Ljunggren を訪ねた。幸い大越博士が前から連絡して下さって居たので SAS 事務所まで Dr. Åke Fritjofsson が自動車を持って迎えに来て呉れて居たので大変助かった。一見まだ若い医師であつたが、車中色々話はずむ。Gothenburg の街が一望の下に見ゆる小高い山の岩石の上に建てられた教会に案内された。其後美事な公園の中を通り抜け、噴水のある Konstmuseet を外からながめ、次に Sahlgrenska Sjukhuset の Dr. K. O. Obrant (Prof. E. Ljunggren は英国に行つてゐる。学会会場で会い、同教授は昨年 Wien で会つた方である) の処に案内された。Mrs. Kerstin Rutgerson, Mrs. Marianne Lund (秘書) の居る室で色々大越博士が主になつて話される。別冊を頂いて庭に出ればライラックの花が咲き乱れてとても美しい。記念撮影を終り Dr. K. O. Obrant の案内で二人の秘書も一緒に、ひえびえする山道や Ingsjor 湖の横を通つて待望の療養所に到着する。London の今学会出席のため来られた Dr. H. Hanley 夫妻も見え、一緒に所内をくまなく見学する。至れり尽せりの設備で、腎摘後の術後療法、化学療法に就いて詳しく説明して頂き一同屋敷の御馳走になり、帰りは Dr. Obrant が空港まで送つて呉れた。

翌25日は Karolinska Sjukhuset に今回の Secretary である Dr. G. Giertz を訪ねた処、会場に行かれてるすだともう帰えられる時間だから暫らく待つてくれとの事であつた。其間各室を見学し、丁度 Dr. Nils Hultengren が膀胱腫瘍患者の膀胱鏡検査をやつて居るのを見学する事が出来た。Kifa 製の膀胱鏡台に興味をひかれた。間もなく Dr. Giertz が帰りに色々話をきき沢山の別冊を頂く。病院の食堂で屋敷の御馳走になり、此処で昨年 Wien でお会いした今回の会長である Prof. J. Hellström に御挨拶を申上げた。同教授は外科を担当され、Hyperthyreoid の手術を得意とされ、今もその手術を終られて其事に関する話を伺つた。此処でマニラから今学会に出席する Dr. A. Domingo を知る事が出来た。学会は7月26日から30日まで音楽堂であり、8月1日はスウェーデン泌尿器科学会が Karolinska Sjukhuset であつたので出席した。此の会で私は Prof. A. Aran (Moskow), Prof. A. Pytel (Moskow), Dr. N. Athanassoff (Sofia) の3人を知る事が出来た。Prof. A. Pytel はソ聯の泌尿器科雑誌で読んで記憶にある人であつたので特になつかしかつた。2日は同講堂で午後1時より American College Surgeon 達の尿路結石シンポジウム(司会は Prof. Hellström)があつたので出席した。此処で Karolinska 大学、病理学教室の Dr. Biörn Ivemark が私達がやつて居ると全く同じ結石の電子顕微鏡的研究を報告したが私には非常に興味深く感じられ、後で同氏と懇談する事が出来た。午前中は Söder Sjukhuset を訪れ看護婦寄宿舎、外科各室を見学し、不図も American College Surgeon 達と一緒に第1外科主任 Dr. Ivar Palmer, 第2外科主任 Dr. Rosengöist Hugo の屋敷の招待に預り殊に Dr. R. Hugo の手術室を見学した処、助手が左足関節骨折の手術をして居た。此病院の泌尿器科患者の手術は Dr. G. Giertz が来てやるとの話だつた。其夜10時にストックホルムを出発し11時半頃オスローに到着した。此処では Ullevål Sjukhuset に Dr. K. Höeg を訪ねた。泌尿器科は第3外科に属しその主任は Prof. Carl Samb である。同教授は何か用事があるらしく、専ら Dr. K. Höeg が色々案内してくれた。彼から尿路結核殊に Partial Resection of the Kidney と Tuberculosis of the prostate treated by TUR の話をきいた。次にここを辭して Rikshospitalet を訪れた。外科主任は Prof. Ebskind で Dr. W. Mathisen が Urology を担当して居る。彼が会つた途端におまえは知つて居ると云うので、何処でかと問返すと昨年 Wien でおまえの電子顕微鏡の研究をきいたと云う。丁

度 Incontinenz の手術がすんだ処で、Incontinenz には Mashau-Marshetti-Krantz の方法を推賞すると言ひ、自分がやつて居る方法を詳しく説明し又 Tasker の手術は26例やつた等と話は尽きない。今から癌研究所に行くが来ないかと云うので、行き度いと申出たら自分の車に乗せ街の西方に1時間も走つたらうか癌研究所附属病院に着いた。此処では舌癌の手術、前立腺の TUR、2-3の膀胱鏡検査を見学した。彼は週三回昼から来ると言つて居た。翌日再び Dr. W. Mathisen を訪れ、TUR, Pelvis Plastik 等の手術見学、其次の日も再び TUR、4才男子の Ureterocele 等の手術を見学した、Dr. Mathisen は実に親切に教えて呉れ、彼の TUR の手のあざやかな事、今回の旅行で一番印象に残つた人である。又 Rikshospitalet では図書室を見学し、此処の女事務員 Miss. Ruth Haugeland に大変御世話になつた。彼女がシェ ヲイツェル博士と親交のある野村博士を知つて居るから、日本に帰えつたらよろしくと伝えて呉れとの事であつた。それから Oslo の東北に位置して中心より随分遠い街はずれにある Aker Sjukhuset に Dr. H. Sommerfeldt を訪ねた。丁度腎腫瘍を取出して居た処で、暫らく見学した。Dr. J. C. Svendsen が各室を案内して呉れた。後で3人種々話し、帰えりには Dr. Sommerfeldt が病院前のバス停留所まで見送り、私が病院の絵葉書を買つて金を払おうとしたら、自分が後で払うからとときかない。

Minox の新型を Zeiss の支店で買うため9日まで出発を延ばしたのであるが、愈々、午後1時オスローをたち Copenhagen に向う。Copenhagen では Kommunehospital へ Dr. Knutzon を訪ねたが旅行に出掛けて居ない。外科の Dr. Yorgensen の甲状腺腫(此地方には多らしく独立した科となつて居る)の手術を見学し、親切な看護婦 R. Wanz 嬢から教えて貰つて Rigshospitalet の外科主任 Prof. Dahl Iversen を訪ねた。丁度手術がすんだ処で、同教授を中心に玄関の前で写真をとる。明日9時から American College Surgeon 達の手術見学があるから来いと云う。いつもニコニコした好々爺である。翌日9時から一行達と51才女の高血圧症(170~230mmHg)の手術(腎摘)を始め其他種々の手術を見た。最初の腎摘の第1助手は Drin. Nelsson がやつて居た。日本でもこうした女医位居てもいいと思つた。次にすぐ近所にある Militalehospital を訪れ、此の病院に Urology があるかと問うた処、何を間違えたか Neurological Surgery に連れてゆかれ Prof. Busch に会わされた。同教授は最近日本に行つたとか、日本の学会から贈られた風呂敷を見せてなつかしがつて居た。

次に此処から北方にある Bispebjerg Hospital を訪問した。此処は泌尿器科は独立して居る。前庭にはアカシヤの花びらが雪の積つた様に真白く一面に散りとても奇麗であつた。ここでも一人の American College Surgeon が来て見学して居た。Prof. J. C. Christoffersen に会う 講師の Dr. T. S. Hansen の Renal papillar necrosis の Op. を見学し、終つて7、8人の Am. C. Surgeon 達と昼食の招待を受けた。ここで Iowa の外科医 Dr. J. W. Schwartz (ライオンズクラブ会員)を知つた。非常においしいチーズを食べたことは忘れられない。Prof. J. C. Christoffersen (ロータリークラブ会員)は就任してからまだ4年位で、その前は Prof. H. Abrahamsen だつたと Dr. Hansen が話して居た。Dr. Hansen は切手の蒐集家であつたので日本の切手を差上げた。同氏より別冊を頂き帰えりには Dr. O. Nygaard Jespersen が車でホテルまで送つてくれた。彼からも彼の著書 Breast Cancer and Leukaemia を頂いた。

12日土曜日午後であつたが Sundby Hospital に Dr. Kjaeld Trautner を訪ねた。三階の外來の横に自宅があり、心よく会つて呉れ、裏庭のテラスで家族一同で歓待して呉れた。腎移植をやつて居るらしく、日本に於ける此方面の研究の様子をたつねられた。Dr. Trautner 夫妻、令嬢はストックホルムの学会に出席して居たので、特に私を知り色々と話がはずむ。一女一男で私の家族と同じだと云う事になり一層の親しさを覚えた。庭で一緒に記念撮影をなし、帰えりには夫人が御自分で作られて居る真紅のパラー輪を切取つて私の洋服のポケットにさして下さつた。翌13日日曜日訪れ、種々興味深いレ線写真を教示して頂いた。15日午前9時からの手術は水腎症で私が病院構内で夫人が外出するのにピッタリ出会つた処、主人があなたの来るのを待つて居るから早くゆきなさいと、甚だ親切な言葉を頂き非常に嬉しかった。約2時間の見学後、同氏と一緒に放射線科にゆきこの Radiologist と沢山な Pyelogram を前に Discussion をなし8冊の別冊を頂いて帰えつた。

14日は朝7時の飛行機で30分かかつて再びスウェーデンに入国し Malmö に渡り、Malmö から電車で30分 Lund に着く。Lund 大学外科 (Prof. Sandblom) に行き、手術場を見学、今日の手術名を聞いたが泌尿器科領域のものは無かつたので割愛した。Urology を担当して居る Doc. G. Jönsson, Dr. L. Röhl に会う。Dr. Jönsson は用事で居らず又 Radiology の Prof. O. Olsson も居ない。此二人はストックホルムの招待会での主人側になつた方達である。此処で写真フィルムをうつしついたので、Dr. Anders Björklund がわざわざ写真屋まで案内してくれた。そして大学の横にある有名な Domkyrkan や Paradisgatan の最古の建築物に就いて話をして呉れた。泌尿器科の各室は Dr. Röhl, Dr. L. Andersson が案内して、昼食の御馳走をして呉れた。嵐になる空模様だつたので二人をカメラにおさめて、直ぐ Lund を去つて Malmö の空港に急いだ。

何処に行つても私の大学と比較にならぬ程奇麗で静かで、設備が整つて居るのに感心して帰国した。異国の沢山の方々から大変親切にして頂いた事は私にとって終生忘れる事の出来ない思い出となるであらう。